

## アメリカン・ボード宣教師文書

—同志社女学校女性宣教師を中心として—

〈スタークウェザー書簡一訳および註一〉(5)

日 比 恵 子 監訳  
 杉 野 マリ子  
 小 林 弘 美

### 書簡翻訳：前号からの続き

〈83〉【杉野マリ子 訳】

日本の京都にて、1879年4月5日、[ウーマンズ・ボードの] 友人宛  
 拝啓

先週の3月31日(月)、私たちの学校の新学期がとても楽しく始まりました。限られた教師陣<sup>1</sup>にも関わらず、すべての事が期待通りうまく整っています。ご存知のように、「キャプテン・ジェーンズのクラスの生徒たち」<sup>2</sup>がこの学期末に卒業する予定で、この残りの数カ月を全員が強い責任感で臨んでいます。彼らの卒業後の仕事<sup>3</sup>も、それぞれにぴったりと思える所に決まりつつあります。私たちの学校で国語教師として選抜されたその内の1人<sup>4</sup>は、もうすでに1つのクラスを教え始めていて、彼の助言や手助けを私は既に高く評価しています。

皆様が本国で祈って下さっている祈りの支援が、私たちにいかに大きな勇気となっているかを、私たちはミッションの祈祷会で何度も確認しました。日本では今、皆様の本国での祈りが絶対に必要な時期で、それなしには、私たちの仕事は立ち行きません。

前学期終了後に起こったことで、お話したい事がたくさんありますが、今触れることができるのは、ほんの2、3のことだけです。東京から350マイルを陸路で京都に来てくれた一行は、その途上でいろいろな話で持ちきりでした。グループの1人が、その後歯が痛くなり、なんと診察に東京まで引き返したのです。この地域の外国人歯科医の治療費はべらぼうに高く、しかも仕事はお粗末だそうです。東京の熟練した日本人歯科医は、虫歯1本に金をかぶせて貰ってもたったの2.75ドルです。でも、そこへ行く旅費が、片道の船賃を含め18ドルもかかるのです。

出発してから最初の数日、一行は、この旅がどうしてこんなに楽しくて、異教に悩まされないのか不思議に思っていました。ようやく気づいたのは、寒さのあまり日本人が服を身に着けているためだ、ということでした。途中の景色は、本当に素晴らしいものらしいです。いつか私もこのような旅を試みたいものです。

私が一番興味深かったのは、東京の先生が、東京と京都の間にある名古屋に、新婚さんの家を訪れた時の話です。一行は道を尋ね尋ね人力車で行きました。元生徒だったその奥さんは、訪問者の名前を聞いた途端、「まさか！」と叫んだそうです。しばらくしてから喜びの涙を浮かべつつ、彼女は先生を歓迎しに表に飛び出しました。私たちが日本人の友人の家庭を訪問すると、彼らは茶菓の接待に忙しくて、会話しても実のない建前だけのことば以上にはならないことがよくあります。ところがこの生徒は、ただ彼女と会いたかったという先生の気持を察してか、時間をかけて実のある会話をしてくれたそうです。

しかしこの家は、もてなしの方も手抜きをしませんでした。やがて素晴らしいご馳走が運ばれてきましたが、それは彼女らが会話をしている間に、ご主人のお父さんがお手伝いさんの手を借りて準備して下さったのだということがわかりました。この親切は、彼女の結婚のいきさつを知れば、もっとよく理解できます。

彼女は助けになるクリスチャンの生徒で、皆の頼みの綱でした。教えるということに類まれな才能を発揮し、自分でも19歳のころから先生になりたいと強く希望していました。ところが突然、父親が彼女を全く面識のない海軍士官と婚約させたという知らせが届いて、彼女は非常にながかりして、教師のところ相談にきました。キリスト教の観点からすれば、見知らぬ異教徒と婚約するなんて、とても悲しい屈辱だと彼女は感じたのです。しばらく考えた結果、彼女は、このように因習に縛られた結婚だけでも父に逆らうのは良くないだろうと結論を下しました。更に、父親がとても感情の激しい人で、もし拒めば、長年父親のために祈ってきたのに、一生父親によい感化を与えられなくなると思って、しぶしぶ同意したのです。そして、悲しみを内に秘め辛い思いをしながらも、彼女は式を済ませたのです。結婚後、ご主人が突然名古屋に転勤になったので、彼女は義父も連れて、夫に伴い名古屋に来たという次第です。この地では知合いもなく全くの孤独で、周囲は皆未信者ばかりだったので、東京から知り合いが来てくれたことに、彼女らは恥も外聞もなく大喜びしたのです。見るからに彼女は楽しい家庭を築いているようで、夫も義父も大事にしてくれていると言っていました。夫にイエス様の事を話しているけれど、彼は、「僕には理解できない」と言ったそうです。

彼女は英語がよくできる人で、夫は英語を教えてと頼んだこともあるそうで、妻に学があるのを喜び、誇りにしているようでした。

2人の神学生が東京からここ名古屋に来ていたのですが、やはり孤独で、彼女同様、来訪者をとても喜んだそうです。夕方、彼らは東京からの一行が泊っているホテルに訪ねて来て、やがてその夫婦もやってきたそうです。自発的にその学生たちが、素晴らしい機会ですから是非一緒に賛美をし、祈りませんかと勧めたので、この未信者の夫は生まれて初めてその祈りの輪にポツンと入ってしまったのです。きっと慣れない居心地の悪い場所だったでしょうに、彼はいつの間にか静かに聞き入っていました。もっとも、その前に、手を叩いて（日本人がよくする頼み方）、お茶とたばこを頼んでいましたけ

れど・・・。

そういう話を聞いて、その地でクリスチャンの仲間がほとんどいない人たちに私たちは改めて深い同情を覚えました。これからも彼らのために真剣に祈り続けたいと思います。この地で神様に従って正しく歩もうとする人たちが、いかに多くの試練と痛みの中を通らなければならないか、筆舌に尽くせません。

私たちは、一行の1人が以前に教えたことのある人を訪問しました。彼女は結婚してそろそろ1年になりますが、京都の教会に一通の手紙を持ってやってきました。日本人女性としては、稀な美しさと上品さを備えた人です。彼女の夫もクリスチャンではありませんが、彼女の信仰に反対しないと約束しています。この夫は、紳士の誉れ高く、時折説教を聞きにくるばかりか、かつて60名もの下士官を礼拝に連れてきたこともあったそうです。6か月間仮住まいをするため、彼も京都へ来ていたのですが、妻が、お気に入りだった讚美歌集は持たずに英語の聖書だけを持ってこさせていたと分かりました。この暗い土地の未経験の分野や誘惑の中に、私たちの生徒たちが優しい子羊のようになって出ていかねばならない現実を、以前にも増して深く感じました。今は亡き立派なホーズ<sup>6</sup>博士がよく言うておられました。「宗教にはわずかに関心があるように思えるけれど、実際にはさほどでもない、皆無に近いのだ」と。

この夫婦のケースをみても、今まで以上に実感させられたことは、私たちの導きでキリストを受け入れたこのような人たちは、私たちが教えられてきたように、キリストに養われることになると思ってしまうがちであるということでした。でも、博士の言葉が本当だとしたら、細かくというより深く、心を耕して行く必要が大いにあると思います。そして、美しい外観に隠された暗い心を、命を与える聖霊にどうかお導きくださいと求めていく必要があると、以前にも増して感じています。

2、3日後、彼女は約束通り私たちの家を訪ねてきましたが、運よく午後

の賛美集会に間に合って、クリスチャンの大きな集いの仲間入りをしました。最後に、彼女が選んだ「イエスに導かれ歩むわが身は」<sup>6</sup>を一緒に歌いました。ああ愛しいわが子！どうか神さまが彼女を導いて下さいますように、彼女だけでなく、哀れなほどに自分が悲惨な状態にいることすら気づいていない日本の多くの悲しい娘たちを導いてくださいますように！この愛する人たちを光に導くために何かをお手伝いをさせていただけるとは、なんと光栄なことでしょう！

ある人が最近、アメリカから便りをくれて、「日本に行った事を後悔しておられませんか？」と訊いてきました。実はそれを読んだ時、思わず笑ってしまいました。どうぞお許してくださいね。でも、何千回もの「いいえ」が私の唇に自然と浮かんだのです。

休暇中に私は友人を京都の有名なお寺に連れて行ったのですが、あんなに心がかき乱された事はありませんでした。年一度の京都博覧会<sup>7</sup>が丁度始まったところで、心地よい春の日々が戻ってきたことと相まって、全国から多くの巡礼者が集まって来ていました。この期間は、僧侶にとってはお祭りの時なのです。彼らは、[巡礼者たちが]多くのお賽銭をあげてくれるので、非常に嬉しく思っているのです。僧侶の幾人かが近づいてきた時の吐く息や振舞いから、彼らが、お米から醸造された国民的飲料の日本酒を、自由に思う存分飲んでいたのでわかりました。

きちんとした身なりの、愛嬌のある優しそうな1人の年配の女性が、私たちを改宗させようとしてきました。彼女は参拝するために進んで、私たちに近づくと、ひたすらに心をこめて私たちを本堂の方に手招きし、満面の笑みでこう言ったのです。「耶蘇<sup>やそ</sup>の信者さんをご利益が一番多いそうで、よかったですね。」そう言いながら、「南無阿弥陀仏！」と、哀れっぽく繰り返し唱え始めました。

私は、寺院の入り口近くによくある哀れな像をもう一度見上げました。それは、自分の体の患部と同じ部位をさすると治ると信じて辛抱強くさすり続

けるような人には、癒しを与えてくれると思われている像なのです。その像はさすられすぎてテカテカで、目の悪い人が多いのか、目の部分が特にすり減っていました。僧侶たちは墮落しているし、最悪の遊興の館がしばしば寺院近くにあったりするのをみると、僧侶たちの宗教や日本の全ての宗教が、人々を高めるのに余り役立ってこなかったのだとわかります。ただ、日本人が優しいことや残酷でないことは、ある程度その教えのおかげと言えるでしょう。

休暇の最後の金曜日、私たちはミッションの集会に参加し、聖餐式で閉会しました。それは私にとって素晴らしい日で、この恵みが長く続き、またこのような集会があるとよいと思っています。たった2、3時間前に知らせてもらうだけで集まれるという今の便利さは、3年前湯沸かし器のような小さなポンポン船で私が初めて京都に来た時と比べれば、雲泥の差です。そのころは大津に行くにも、2時間どころか2日もかかったのですから。今は琵琶湖の河口にある大津まで鉄道工事が行われています。

金曜日のミッション会議の翌日の土曜日に、大阪英語学校<sup>8</sup>の卒業式が行われました。招待客の中に25名もの宣教師がいて、しかも好意的な目が注がれていたことは、その学校の新たな時代を告げるものでした。キャプテン・ジェーンズが2年前この学校に呼ばれる<sup>9</sup>前は、この学校の道徳は低下していて、特に外国人教師が一番悪い見本になっていたのです。今はそこに4人もクリスチャン教師がいて、彼らの影響、特に2人の日本人教師の影響は甚大です。昨年オーバリン大学から帰国した田村<sup>10</sup>氏はその一人です。

今日、数名の生徒の両親が遠い故郷からわざわざ訪ねてきました。日本の習慣ではいつも自分や自分の家族のことをひたすら卑下して話すのです。ですから、自分の子どもを学校に連れてきたときは、親は必ずこの子は馬鹿で何も知らないし、何もできないと私たちに断言するのです。そして、どうぞよろしくお願いします、でも厳しく叱ってやってくださいなどと頼むのです。今日もそうでした。生徒の中で、やや大きくなりすぎですが、明らかに才能もあって私を喜ばせてくれたこの子のことが気の毒でなりませんでした。こ

の親切な両親は、にこやかで礼儀正しいのに、この調子で話し続けるので、とうとうその生徒は恥ずかしいと手で顔を覆って、ついには部屋から泣きじゃくりながら出て行ってしまいました。これが特にかわいそうなのは、彼女は2週間も両親が来るのを待ちわびていて、両親の到着を知って大喜びで会いに走って行った後だったからです。

新島夫人は、休暇になったので帰郷する女生徒2人<sup>11</sup>に付き添って、岸和田に行かれました。覚えておられるでしょうが、この岸和田は、スプリングフィールドで勉学中の若き元大名〔岡部長職〕の故郷で、彼が岸和田へ説教者を送ってほしいと依頼してきたのでした。新島夫人は当地の人々に説明したり話しかけたりするのに、2人の少女が助けになると、とても喜んでおられました。また、讚美歌を歌うときにも、彼女たちはかなり役に立ちました。この2人は昨年9月に入学したのですが、「世の光なるイエス」<sup>12</sup>や「イエスの許に来なさい」<sup>13</sup>などの英語の讚美歌を歌いました。彼女たちはここ京都でも歌うのが大好きで、皆とても嬉しく思っています。その一方の少女はまだわずか10歳で体つきも小さく華奢ですが、心の中には神様への愛がしっかりと根づいており、その愛の力で、生まれつきの恥ずかしさを乗り越えて、キリストのために働いています。彼女たちは2人の新しい生徒<sup>14</sup>を連れて学校に戻ってきました。

もう1つとても興味深い話があります。西南戦争に加担し、神戸の牢獄に入れられていた人の話です。入獄後間もなく、そこで火事が起こりました。彼は彼が信仰に導いた人たちと共に、獄から逃げずに一生懸命火を消して、秩序を守ったのです。そのお返しに彼の刑期は軽減され、彼が出獄して鹿児島に帰るお伴を英学校の卒業間近い生徒が頼まれました。この人物は影響力のある、明らかに美しい信仰をもった人です。

最近寺院に行ってみると驚いたことに、至る所でみがいいたり新しく見せようとしたり、「残っているものを強め」<sup>15</sup>たりしています。長年苔が生えて荒れ果てていたある寺院と境内が、私たちの家近くに来れることになった新し

い公園の向かいにあります。今全く新しい装いになってきています。京都の南にある伏見稲荷神社では、最近新しく作られた御影石の狐の像が金ピカに装飾を施されて、金網の檻に大事そうに入れられているのを見ました。私はこのような奇妙な境内を初めて目の当たりにし、後の参考になるように詳しく調べてみました。この国にはきつねに関係する迷信は数えきれない程あって、迷信への信心を表すものは見るに堪えません。新しい『キリストの生涯』が切に求められています。「主の許に来なさい」<sup>16</sup>という小さなトラクトが改作され日本語に訳されたと聞いて大変うれしく思っています。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

- 1 この時点では、教師陣は専任としては、スタークウェザー1人で、他に舎監及び賄方として山本佐久、礼法・習字の教師として新島八重（但し、八重の名前は正式の教員名リストには1度も出てこない）がいた。また、part-time的にデイヴィス夫人やラーネッド夫人の助けを得ていたと思われる。
- 2 熊本洋学校でL・L・ジェーンズ【スタークウェザー書簡（240）註7、*Asphodel* 45、p.296参照】に学び、同志社では「熊本バンド」と呼ばれていた生徒たち。同志社英学校第1回卒業生15名は全員が熊本バンドであった。
- 3 同志社関係への就任は、英学校に3名、女学校に2名であった。
- 4 宮川経輝（1857-1936）卒業式での演説題が「女子教育論」であった。女学校では、国語の他に、英語・漢文・歴史なども教えた。
- 5 Joel Hawes（1789-1867）ハートフォードの第一会衆派教会の牧師であった。後にスタークウェザーが学んだハートフォード女子神学校の理事に名を連ねている。
- 6 “All the way my Savior leads me.” アメリカのメソジスト教会救済伝道団の一員であり、詩人・作詞家・作曲家であった Fanny J. Crosby（1820-1919）が書いた詩。ゴスペル作曲家でバプテスト教会牧師でもあった Robert Lowry（1826-99）作曲で、1875年出版の *Brightest and Best*, ed. R. Lowry & W. Howard Doane（New York: Biglow & Main, 1875）に讃美歌として収録された。
- 7 第8回京都博覧会は、1879年3月15日から6月22日までの100日間、京都御苑内で開催された。
- 8 1873年に大阪府に設置された官立の外国語学校。中等教育機関で、第三高等学校



の前身である。この時期、学校のモラル向上のため、アメリカン・ボードのミッションに依頼して、宣教師を意図的に採用したようである。

- 9 熊本洋学校の教師であったL・L・ジェーンズは、洋学校での任期満了後、一時大阪英語学校で教鞭をとった。
- 10 田村初太郎（1852-1915）江戸に生まれ、小川開成所で英語を学び、しばらく英語教師をした後、1870年脱出国して米国船に便乗して渡米。苦学生として辛酸をなめたが、1871年岩倉遣外使節来航の際に脱走罪を免ぜられ官費生扱いを認められた。その後、オーバリン神学校に学び、受洗。1878年、父の病のため帰国。澤山保羅の世話で大阪英語学校に職を得た。16年間に在職。
- 11 岸和田藩士であった実業家、山岡尹方（1840-1915）の長女もと次女京。
- 12 “The Light of the World” Philip P. Bliss (1838-76) 作詞、作曲。
- 13 “Come to Jesus” Eden R. Latta (1839-1915) 作詞、John H. Tenny (1840-1918) 作曲。
- 14 田代初と神西秀と考えられる。
- 15 新約聖書「ヨハネの黙示録」第3章2節。
- 16 “Come to Jesus” 広く配布された福音のトラクト。特に南北戦争時代に兵士の間で広まった。Newman Hall (1816-1902) 著、ヴァージニア州ピーターズバーグの福音派トラクト教会より出版。

#### 〈84〉【日比恵子 訳】

日本の京都にて、1879年5月11日、[ウーマンズ・ボードの] 友人宛  
拝啓

今まで、手紙を書くのに、これほど狭いスペースにぎっしりと文字を詰め込んだ<sup>1</sup>ことはなかったと思います。

毎日の学校の仕事をこなす間にも、いつもより多く外国からの友人が訪問してくださっています。非常に有難いことです。ロードアイランド州のベインブリッジ師が、家族とともに、世界旅行の途中で立ち寄って下さいました。そして、生徒に英語で数回の説教をして下さいました。一度は神のご用に完全に身を捧げることについてお話しくださいましたが、生徒たちは彼の精神と言葉の両方に深い感銘を受けました。

今、門のところで強いノックの音が聞こえますが、可愛い生徒たちが戻っ

てきたのです。彼女たちは週に一度「聖書の中の女性たち」のコース<sup>2</sup>をとっても興味を持って学んでいるようです。勉強は申し分なく進んでおり、若干の例外はありますが、皆、心からイエスに従おうとしています。寮に在る間は比較的やり易いのですが、生徒たちが暗闇の中に帰っていくと、それが難しくなるということに誰もが気づいています。そして私は、生徒たちが自分の人生の中で確かな信仰と尊い行いの源を見出すのを手助けしたいと強く願っています。罪がどれほど私たちを神から遠ざけているかを思えば思うほど、このことの難しさをますます実感します。

いまだに大きな誘惑の中で学んでいるけれども勇敢に信仰を持ち続けていて、光の中心となりつつある生徒や伝道者からの多数の報告はとても励みになります。私の先生<sup>3</sup>が書いているところによると、彼の教会の人たちは3時間というのは1度の礼拝時間としては十分ではないと考え、疲れて熱意をなくしているように見えようものなら、先生のことをきっと誤解し怠けていると思うでしょう、と言うのです。彼らは、キリスト教の1回の説教を準備し説き聞かせるのに必要な作業を、最初は全く理解できないようです。ある人が最近私に説明したように、「仏教徒のように説教をすれば、何の苦勞もないのですよ。面白い話をして、聴衆を笑わせたらいいだけですから。」その上、日本人は時間を大事にせず、説教に遅れてやってきて夜中の11時か12時まで居残ります。夜更かしして翌日は休まずにはいられないと、そういう人のことは怠け者と呼ぶのです。

今年の卒業生クラスのことが非常に気がかりです。1か月もしたら、生徒たちは学校から巣立ちます。昨年の経験から、皆に絶えず救い主と聖霊の助けが必要だとわかります。

ジョウゼフ・クック<sup>4</sup>が、心が震えるような彼のことばを同志社の非常によくできる生徒の1人が日本の聴衆に引用して用いたのを聞いていれば、彼にはきっと励みとなったことでしょう。想像できないでしょうが、現在の日本には悪い影響も勿論ありますが、良い影響も一杯あるのです。

東京から来た女性が数日私たちのところに滞在しています。気晴らしのために彼女の以前の先生の故郷を訪ねる旅行の途中に立ち寄ってくれたのです。彼女が先生のことや教会での仕事のことについて話してくれたことに大いに興味を持ちました。その先生の念願は、ただ、イエスのことを教える人になりたいということで、説教者になる気は毛頭ないそうです。彼女は先生に仕事のことについて何かを語ってもらおうとしたのですが、先生は、「私が何をしているのかはお話ししたくありません。」と言うのです。この先生は皆にとっても好かれていて、たくさんの聴衆を教えます。今は、毎週日曜日毎に学校が素晴らしい日曜学校に替わるので、定期的に教えています。この先生は立派な英語教師で、その地では唯一の教師なので、非常に学識があると思われています。そして多くの人がこの先生に教えてほしいと願っています。ご長男なので、慣習によって、父親の財産を相続し、父親が50歳になったら面倒を見なければならぬはずですが。ある晩、東京から来た女性がこの先生と一緒に翌日の夜の授業の準備していたとき、2人は、綱と父親を残してイエスに従った弟子についての聖書のことば<sup>5</sup>に行き当たりました。そのとき、女性は先生の頭が垂れて行くのに気づきました。運悪く、彼女自身とても疲れていたため、先生が無関心で眠りかけているように見えたことに少し苛立って、少々声を荒げて先生を起こしました。すると先生は突然泣き出して、「いえ、眠っていたのではないのです。自分の父を置き去りにできるかどうかを考えていたのです。」と言ったのです。この先生は父親に手紙を書き、(旧約聖書の時代と同じく大切な)相続権を放棄し、自由にキリスト教を広める仕事をしたいと伝えました。その父親は、非常に影響力があり知的な人ですが、次のような返事を書きました。「神は私に数人の息子を与えてくださった。お前は外国人から5年もの教育を受けたから、彼らのために5年よりも長く仕事をするのは当然のことだ。相続権は他の息子に与えよう。」それでこの父親は役所にそのような処理を申し出ましたが、申請は却下されました。父親はクリスチャンの息子に書きました。「私はお前を主に捧げたのに、主は

お前を受け入れようとはなさらなかった。だから急いで故郷に戻って、私たちにこの新しい宗教を教えてくれないか。」このことは、吉報が日本のはるか離れた土地にさえも葉っぱのように散らばりつつあることを示す、ほんの一例にすぎません。

この女性は今、日本での6年が過ぎた後に帰国しなくてもいいようにしてもらおうと悪戦苦闘しています。彼女が初めてやってきたのは7月で、伝道者が十分な仕事をせずに涼しい避難所で勉強しているのを見て、彼らのことを「怠け者」と呼び、「決してあのようにはするまい」と決心しました。しかしながら、しばらくやってみて彼女が学んだことは、人を衰弱させる、このひどい天候のもとでは、仕事の計画を幾分変えないと、本国で達成される仕事の4倍をこなすことは期待できないということでした。今彼女は例の頭痛に悩まされ、勉強することも物を覚えることもできません。

昨日、会議が開かれ、英学校の卒業生を聖職者に任命することを決めました。女生徒たちは、クリスチャンであることを告白し、全員が他の人を助けて仕事をしたいと強く望んでいます。特に1人の生徒には熱意があり、その信仰と祈りは卓越したものです。男兄弟がいないので、彼女の父親は養子を迎えました。彼女の未来の夫になるはずです。父親は今、自分のように医者にするために、その養子に東京で教育を受けさせています。

日本の少女は自分の将来については何も意見をもってはいけなし、将来のことがそれとなくほのめかされたら、極端なまでに恥ずかしそうにしなければいけないのです。でも私とその女生徒の間には信頼関係があるのだと考え、彼女に思い切って未来の伴侶について尋ねてみました。すると、彼女が私にはっきりと彼はクリスチャンではないと言ったので、もし彼がクリスチャンでないのなら、幾分悲しい将来が待っていますよと言いました。彼女の信仰は強く、心は高潔なのですが、その人のために祈ってあげることができるということは考えたことがなかったようです。私の質問にその生徒は、他の人たちのためには熱心に祈っても、彼のために祈ったことはなかったと言い

ました。私が彼女に彼のために祈る義務と特権を課したことに對して、彼女が感謝の気持ちを繰り返したのは心底ありがたく思つてのことだと思います。

さて、私たち皆は、グラント將軍<sup>6</sup>の到着を待ち望んでいます。將軍のために「神戸ホーム」での集会を計画しています。日本のこの地域には軍人だった宣教師が7人もいます。東京で、あるアメリカ人が、「グラント將軍は誇示することや注目を浴びるようなことは好まないと思いますよ。」と言つたと聞いております。そうなのです。將軍がもつたいぶらない方だと十分に承知しています。それ故に將軍に敬意を払いたいのです。

仏教徒の素晴らしい学校<sup>7</sup>が落成して1週間が経ちます。京都の立派なお寺が関係しています。大勢の人々が落成式を見るために非常に遠くから来ていました。それに加えて恒例の博覧会で京都の町は込み合っています。ある友人に、キリスト教にとつても仏教にとつても、外から入ってくる不信心以上に怖いものはないと思うと言つたのは、あの宗派の指導者<sup>8</sup>でした。

岡山からいいニュースばかりが入ってきます。そこはウィルソンが行つたところです。パーミリーは、自分にはどこの空気よりも神戸のが合うと思つていて、夏の間は神戸に留まっているつもりでいます。秋には彼女がこちらに戻ってくれることを待ち望んでいます。何も間違いが起こらないようにと祈ってください。

先週は、ある家族が親切にも訪問してくれて嬉しかったです。来日する直前に出会つた人たちです。お互いにまた会えればと楽しみにしていたので、ここ京都で会えたことに私たちがどれほど感謝しているかおわかりいただけるでしょう。でも、オハイオで参加した心が震えるような集まりの思い出がどれほど大切なものか、そして私にはそれを思い出すことが絶えず刺激になっているということをご存じないでしょうね。

ハートフォード支部の会長トンプソン夫人からの手紙が今私の前にありますが、返信を出さないままでした。今は神のお顔をご覧になっている夫人にどのようにお返事を書けばいいのでしょうか。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

- 1 この手紙はタイプライターで打たれている。スタークウェザーの書簡でタイプライターが使用されているのは、これが最初である。
- 2 「聖書の中の女性たち」のコースに関しては、スタークウェザー書簡(82)【*Asphodel* 46、p.195】参照。
- 3 まもなく彦根教会初代牧師となる本間重慶のこと。
- 4 Joseph Cook (1838-1901) 世界的伝道者。ハーヴァード大学、アンドーヴァー神学校を卒業後、ボストンで伝道に従事。ピューリタン信仰を鼓吹した。彼の来日は1882年4月であるが、その名声はすでに日本の若いクリスチャンの間に知れ渡っていたのであろう。
- 5 新約聖書「マタイによる福音書」第4章18-22節。
- 6 Ulysses S. Grant (1822-85) 米国第18代大統領(在任1869-77)。大統領任期終了後の1879年、世界旅行の途中で日本を訪れた。関西も訪問予定であったが、コレラ蔓延のため中止となった。
- 7 1639年西本願寺に創設された学寮から始まり、1876年に大教校が設立された。1879年5月、大教校講堂と生徒寮(現・龍谷大学大宮学舎本館、北翼、南翼)が落成した。
- 8 浄土真宗本願寺派の赤松連城のこと。彼については、スタークウェザー書簡(81)註13【*Asphodel* 46、p.190】参照。

〈244 ½〉【小林弘美 訳】

日本の京都にて 1879年5月22日 クラーク博士宛

拝啓

この前のウーマンズ・ボード宛の手紙をうっかりして正式の用紙を使わないで、誠に申し訳ありませんでした。大変な状況下であの手紙を書いたものですから、あのような拙い一通を書くことでも私にできた精一杯のことでした。

信じ難い額の遺産<sup>1</sup>のお知らせをいただき感謝の言葉もございません。私たちがこの遺産が賢明に使われるようにと念じながら仕事をしていく所存で

す。

私たちの学校は着実に繁栄しています。試験が近づいていますが、覚えるのは満足感のみです。もうすぐ英学校を卒業する最も優秀な生徒の1人〔宮川経輝〕が、この9月から女学校専任の日本人教師となることが決まっています。彼はすでに仕事を始め、どうしたら学校を隆盛に導くことができるかに一生懸命です。彼の努力により、『女学校広告』も改善された形となり、履修選択学科目<sup>2</sup>も詳しく記載されることとなります。彼が示してくれる優れたクリスチヤンの手本、これもまた、女学校にはかけがえのないものになりつつあります。

本国でもそうですが、ここでの校務は他の種類の仕事に負けないだけの面白い話が毎月毎月あるわけではありません。真の信条が深く根づいたのを見て心から満足する以外には、無用な興奮や大騒ぎは細心の注意を払って避けるようにしています。クリスチヤンとしての人格が植えつけられ、しっかりと形成されていくのを見て大いに満足しています。このようなことを毎日確実に私たちは目の当たりにしているのです。

昨日から数えて2週間目に、神の思し召しがあれば、教会が彦根に設立され、牧師が任命される予定です。以前この生徒だった2人の既婚女性とそれぞれの夫は、彦根教会が設立される時に洗礼を受けて教会員になる予定です。任命された牧師は、2年間、私の〔日本語の〕先生でした。それ以前はギュリック<sup>3</sup>の先生でしたが、1年近い伝道生活によって、彼の信仰はだんだんと完全なものに近づき、その高潔な強い性格に磨きがかかりつつあります。先ず12名が受洗し、他の人々は暫く待つことになりました。彦根には格別の苦難がありました。ギリシア正教を教えるようになった人が、故郷の彦根に戻ってきたこと<sup>4</sup>は最大の試練でした。

当初から非常に積極的だった人がとても変わりやすい心の持ち主だとわかりました。後になってその人は、キリスト教は彼を罪に溺れさせないことがあまりにも明白だからと言って、クリスチヤンを妨害しました。しかし今は、

当人も罪を悔いているそうです。

彦根出身で在学中の残り2人の生徒は、教会設立式に行くようです。八日市の教会設立は秋まで延期<sup>5</sup>となりました。そこで仕事をしている生徒は明らかに地域の人々の信頼を得つつあります。

5月24日。J・D・デイヴィス先生経由で、今日ここで4月21日付のあなた様のお手紙を受け取りました。先生は用向き（ミッション会議を開く家探し）でお出かけになって、幸運にも神戸で新米の女性同労者に会われました。26日にはここ〔京都〕でポーターさんにお会いしたいと願っています。ウィリアムさん一家は27日の船で旅をお続けになるでしょう。

お手紙にお書きになっているご意見は、日本のキリスト教化は日本人伝道者から起こりつつあるという大きな見込みについてでしたが、私にも最近そのような思いは募っていますし、他の人たちもきっと感じているはずですが、けれども、ここ日本では、外国人宣教師の数を減らす時期はまだ来ておりません。この現場を見ると、直接の外国伝道は主としてこの国を救うことに発揮されねばならないという思いの重圧がかかると、ただ気が滅入るばかりです。徹底的に真の福音の感化を受けて故郷に帰って行く人が比較的少なくても、神の恩寵により、日本全体は徐々に感化されていくでしょう。そして、この感化を与える仕事に参加しているのは、私たちだけではないのです。他の教派から出て〔キリスト教の〕光を掴み広めていく人のことを次々に聞くのはさわやかな気分させられます。

安中で仕事に就くようにと命じられた極めて優秀な若者の中に、両親が鹿児島にいる人がいますが、そこには献身的な先生が東京の長老派教会から戻ってきています（そのことについては、短い便りをウーマンズ・ボードへ書き送りました）。その若者は、安中ででの仕事に携わる前に鹿児島に帰るつもりにしていますが、彼が言うには、「両親にその先生を紹介するため」だそうです。その先生はとても控えめだけれど優れた仕事をしています。

以前教えを受けた宣教師が、その先生からわざわざ直接便りをいただきま



した。説明として彼は、「何をしているか話したくない」と言っています。私たちはどんなにその気持ちに共感できることでしょうか。本国のあなた様には私たちが負っている十字架を想像なさることは、とてもできないでしょう。

八日市の同労者からの手紙を読んでもらうために、ついさっき手を休めたところですよ。彼は暗黒の勢力に囲まれています。昼夜を問わず、ばくち打ちやその他ありとあらゆる悪人の真只中で、色々な楽器が様々な音を彼の耳に注ぎ込んでいます。しかし彼は自分の立場をしっかりと保持しています。教会がそこに設立されるのは秋になると思います。新島氏はそこへ出かけ、一両日で戻ってきました。新島氏がしばしば遭遇するつらい立場に置かれていることや、彼が気高く謙虚なキリスト教精神に満ちあふれた類まれな特性の持ち主であることに、私たちは大いに感謝しています。とても多くのことができるので、私たちのため、何よりも神ご自身の大義のために、神が新島氏の健康を支えお守り下さいますようにと心から願います。

7月末日に大阪で開かれる予定の日本人クリスチャンの集会<sup>6</sup>に興味を持って注目しています。その頃は確かに大変暑いでしょうが、私は出席したいと思います。旅費がかかるので喜んで出席したいという人の数は多くはありませんが、昨年東京の会では約600名の出席がありました。

この前の手紙で、「仕事に適した」助力者を送ることについて触れておられました。そのように遠方であって誰が適しているかを決めるのは難しく、深くご同情申し上げます。宣教師に必要な考え得る限りの資質について本国で聞いたことを考えることがよくあります。神学上の十分な訓練を受けなかったこと、教師になるための実地の徹底した訓練を受けなかったこと、特にここ日本での生活に関連して、大工仕事、庭師、造園家、百姓、仕立て屋など、おおよそ考えられる限りの役に立つ諸々の仕事の経験が無いことをしばしば後悔しています。ひとりの人間がこれら全部を兼ね備えていることはめったにないでしょうが、いくつかの試練を体験することは、それがその人にとって祝福されたものでありさえすれば、ここでの最善の役割には大いにふさわ

しいこととなるでしょう。本国ではもっとも輝かしい革新的なことも、外国の地では広範な成功を保証するものにはならないと思います。

私たちが学ぶべきことは真の謙虚な心です。もし来日前にその心が十分に植えつけられていないなら、本国から遠くはなれたところでその心を身につけるには、少なからぬ厳しい剪定を必要とするかもしれません。私たちは日本では幸いなことに、非常に我慢強い国民の中に居ります。日本人たちは、自分たちの感覚に合わないはずの多くのことにおとなしくじっと耐えているのです。本源においては、本国で最高のマナーを備えている人と比べても決して劣りはしないのです。外国人が衝動に駆られて感情的に足音高く忙しく駆け回っても、白足袋を履いて通りすぎるとき、羽毛が落ちるほどの足音しか立てない国民の間では、新しい宗教のための、人を納得させる議論にはならないのです。

私は、約束された宣教師仲間と一緒にでないという大きな試練の下におりますが、神のご加護によってこれまで守られてきました。ラーネッド教授ご一家が引っ越されたらどうしましょう。「今まで、主は私を助けてくださった」<sup>7</sup>と心から言えます。今なお神戸に留まらざるをえないパーミリーに、常に深い同情を覚えます。

私は有馬で夏を過ごしたいと思っています。宣教師の大きな輪の中に居りたいという気持ちがあって、有馬に行きたいのです。もっとも、単に健康のためだけなら、比叡山という涼しい高地よりいい所はありませんが。どこへ行こうとも、とても切り詰めた質素な暮らしになります。

私たちは、こちらの無牧の2教会に牧師が任命され、これまでなされてこなかった規則的な牧会が始まる時を待ち望んでいます。京都は本国アメリカの古い保守的な都市にたとえられます。一方神戸は、むしろアメリカ西部のように、ひたすら変わりつつある人々から成り立っているのです。そこの人々は新しい友人関係をつくるのが好きですし、そこでの伝道はもっと急速に広がっていくでしょう。いずれにせよ、組織的な訪問はいままで何も行なわれ

ませんでした。いつか暇を作って、近所の人々でも集めたいと心から望んでいます。ラーネッド夫人と私は教会員を訪問するように心がけています。

少しでも時間が取れるときには、この近くの直ぐ通りに面したところにある講義所にオルガンを持っていき、子どもたちと一緒に歌ったり話したりします。かなり大勢が集まり、嬉しいことに、利発な子どもたちが様々な絵や遊びを離れて、讃美歌集を求め、実に熱心に「主われを愛す」<sup>8</sup>や「あまつみくには、たのしきぞ」<sup>9</sup>を習い始めるのです。

公立学校の先生はいつも私にやさしく、頻繁に誘ってくださいますが、その学校訪問の機会に乗じる時間がまだありません。友だちを作ったり聴衆を引きつけたりするこのような機会は、新島氏の自宅近くでも、第三公会においても、各々の教会センターで同じです。

クリスチャンになる日本人女性は、主のためにどのように偏見を克服し近隣の人と付き合えばいいかを特に導き示される必要があります。神戸や大阪の何人かの女性のように、もしその女性が謙虚で導かれることを厭わなければ、聖霊が彼女を異教徒の心の冷酷なプライドから導き出してくれることでしょう。私は異教徒の心にあるプライドほど冷酷なものは何もないと確信しています。

シェフィールド氏が暫し訪ねてくださって、とても元気づけてくださいました。この次の手紙では多くの興味深いことをお伝えできるでしょう。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

追伸

入念な個人指導がどれほど必要で、好機をとらえるのが如何に遅いかを示すものとして、丁度適切な例があります。ある女性が昨年うちに以前居た所から京都に移って来ました。前の土地ではクリスチャンとしての働きをする随一の人だとみなされていましたから、彼女は影響力を発揮するだろうと、私たちは当然喜んで期待しました。しかし、その後、家族に病人が出たこと

もあって、彼女にはいまだに近所の知り合いが1人しか居ないという有様です。2人の女生徒が日曜日に学校から出かけて行って、お互いの信仰を強め、聖書を勉強し、一緒に歌いお祈りをします。日本では引越してきた人が先ず挨拶回りをしますので、彼女が隣人のために祈ることにより、周りを支援する方向へと導かれますようにと願っていましたが、その様なことは何もありません。非常につらいのは、その2人の旧友が家に出かけて行っても、「今日は会合を失礼します」という伝言があるだけということです。会合と言っても、ただ他の2人のクリスチャンの仲間と会って、彼女にとっても大切に思えることを親しげに話し合うだけなのに。

人間の心がこんなにものろく鈍いかと、私には意外な話でした。

A. J. S.

- 1 1879年、アメリカン・ボードに、コネチカット州ニューロンドンの Asa Otis の遺産100万ドルが寄付された。このオーティス遺産のことと思われる。その年11月5日には、ボードから、8千ドルを毎年同志社に寄付することに決まったと通知された。
- 2 それまでは簡単な規則と授業科目名のみを記載していた『同志社女学校広告』が、1880年度から、同志社女学校規則、舎則、学課課程（本邦科と英書科、それぞれの学年、各学期の履修科目）を明記している。
- 3 Julia Ann Eliza Gulick については、スタークウェザー書簡〈244〉の註11【*Asphodel* 46, p.171】参照。
- 4 詳しくは、スタークウェザー書簡〈82〉【*Asphodel* 46, pp.190-197】の、特に192頁参照。
- 5 実際には、彦根教会設立の翌日、1879年6月5日に八日市教会が創立された。
- 6 第2回基督教信徒大親睦会のこと。この年の7月末に開催予定で、スタークウェザーは出席を待ち望んでいたが、コレラ流行のため流会。1年遅れの1880年7月13日より5日間、大阪土佐堀梅花女学校で催された。第1回親睦会は、1878年7月、東京で開催された。
- 7 旧約聖書「サムエル記上」第7章12節。
- 8 “Jesus loves me” 現在の『讚美歌』461番。
- 9 “There is a Happy Land” 現在の『讚美歌』490番。